

第44回神戸女学院大学 英語英文学会 (KCSES) 大会報告

英文学科長 松尾 歩

英文学科卒業生、大学院生、大学院修士生の研究発表の場として設立された神戸女学院大学英語英文学会 (KCSES) は今年で第44回目を迎え、去る11月29日、晩秋の爽やかな気候の中、開催されました。今回は言語コミュニケーションコースの担当で、中央大学文学部で教鞭を取られている平川眞規子先生をお招きして特別講演を賜りました。ご講演では平川先生のご専門である第二言語習得の観点から、日本語とフランス語のバイリンガル児に見られるそれぞれの言語とジェスチャーの関係をお話いただきました。津田塾大学をご卒業後、マックギル大学でPh.Dを取得され、現在、第二言語習得の中でも文法発達の分野でご研究を深めておられる平川先生よりこのようなご講演をうかがえたことは、文部科学省による英語教育改革の真っただ中である今、とても有意義で貴重な機会となりました。また学会前半部には、本学大学院英文学専攻で学び、その後も研鑽を積んでいる佐藤エリ氏と中島道光氏がそれぞれ、ジョージ・エリオットの作品について、そして、辻調理師専門学校での講師経験を元に、日本の食文化を英語で発信することについての研究発表を行いました。

まず平川先生の特別講演では、日頃語彙面及び統語面から発達状況を研究されることの多いバイリンガル児のジェスチャーに焦点を当て、とても画期的な研究をご紹介くださいました。日仏バイリンガルの子どもと、モノリンガルの子どもの対比をすることによって、バイリンガル児のジェスチャーの違いがますます浮き彫りになり、自然発話と共起するジェスチャー研究の重要性について新しい発見がありました。在学生にとりましても、非常にアクセシブルな内容であったので、在学生の向学意欲の推進を目的としたKCSES設立趣旨にかなったご講演でし

た。参加者からも活発な質問や発言があり、ジェスチャーから分かる言語発達の現象に皆興味を示していました。平川先生には遠路ご来校いただき、普段聴くことのできない研究内容についてご講演いただけて、大変感謝しております。

次に研究発表についてですが、佐藤エリ氏は“Seeing through the mind’s Eye: Vision, Memory, and Imagination in George Eliot’s Three “Recollections” and her Works”と題してビクトリア朝時代の作家論を、中島道光氏は「日本の食文化を英語で表現する」と題して日頃神戸女学院大学で教えている英語の授業の内容にも触れた発表をいたしました。この発表からも、発表者がそれぞれイギリス文学研究や英語教育に多大な興味を持っていること、そして、日頃弛まぬ努力をしているということが明瞭に伝わってまいりました。発表後も質疑応答が友好的な雰囲気で行われました。

このたびの大会において、教員たちは今後の活躍を期待できる卒業生たちと、研究内容に関する会話だけではなく嬉しい再会の時間も楽しむことができました。当日ご参加くださった平川先生や発表者の二人、そして旧教職員、他学科の先生がた、職員、並びに日頃 KCSES をご支援くださっています会員の皆さまやコミュニティの皆さまにも御礼申し上げます。

特別講演

日仏バイリンガル児の ジェスチャー使用について

平川 眞規子

(中央大学文学部人文社会学科英語文学文化専攻 教授)

発話に伴う自発的ジェスチャー (Co-speech gesture) は、その表現する内容が発話の内容と重なることが多く、2つの表現形態には共通の基盤があると考えられる (McNeil 1985、喜多2002)。本講演では、自発的ジェスチャーの中でも、映像的ジェスチャー (iconic gesture) に焦点を当てた日仏バイリンガル児の研究を紹介する (*Zvaigzne, Oshima-Takane, Hirakawa, 2019)。

映像的ジェスチャーとは、動作または空間的な出来事や状態を描写するジェスチャーである。映像的ジェスチャーが身体の動きを通して、具体的なモノや出来事に関する補足的情報を与えるとすれば、ジェスチャーの使用と話者の言語能力や言語レベル (熟達度) は関係があると考えられる。先行研究では「言語レベルの低い話者は、適切な語彙が浮かばない等の理由で、より頻繁に映像的ジェスチャーを用いる (Alibali, Kita, & Young, 2000, Nicoladis, 2007)」、「言語レベルの高い話者は、より複雑な情報を伝えるために、より頻繁に映像的ジェスチャーを用いる (Nicoladis, 2002; Nicoladis, Mayberry, & Genesee, 1999)」、「言語レベルとジェスチャー使用には関係がない (Nicoladi, Pika, & Marentette, 2009)」と、相反する主張が唱えられてきた。この背景には、各先行研究で用いられた実験内容 (課題) の難易度や言語能力を測るテストの違い等に起因する可能性がある。

本研究では、先行研究にない言語の組合せであるフランス語と日本語のバイリンガル児と各言語のモノリンガル児 (4歳～6歳対象) を対象にすること

で、3つの言語レベル (高中低) の学習者を含んでいる。そして、言語レベルがジェスチャーの使用頻度に影響を与えるかどうか、フランス語と日本語で2つの実験を行なった。バイリンガル話者は、二言語の接触時期や環境の違いから、二言語の能力に差があることが多い。もし言語レベルがジェスチャーの使用頻度に影響を与えるのであれば、バイリンガル児のジェスチャー使用にも二言語で違いが出るはずである。また、同一話者を対象にすれば、認知的な発達度など、言語レベル以外の要因となり得るものは統制されるので、純粋に言語レベルの影響を比較することができる。

カナダ・モントリオール在住の日仏語バイリンガル児と仏語モノリンガル児、東京に住む日本語モノリンガル児が実験に参加し、その結果、言語レベルとジェスチャー使用の間には、いわゆるU字型の関係があることが示された。すなわち、高レベルと低レベルの児童には、中レベルの児童に比べて、より多くのジェスチャーが見受けられたのである。以下に、実験の概要 (実験方法と結果、考察) を述べる。

実験方法として、「指示対象コミュニケーション・タスク」という独自に開発したタスクを個別に実施した。このタスクでは、子どもと実験者の前にそれぞれモニターが置かれ、モニター上に同時に2つのアニメ映像が映し出される。2つのアニメ映像はよく似ているが、動物の動作、形、大きさなど、ある一つの特徴において異なっている。例えば、「体の表面がスムーズなとかげ」と「体の表面がトゲトゲしたとかげ」(‘smooth’ vs. ‘spiky’) がスクリーン上を左から右へと動いていく場面が提示される。子どもは、2つの映像のうち星マークの付いている映像について特徴の違いを説明し、実験者に星マークの付いている映像を当てさせるというものである。言語レベルは、各言語の表現語彙テスト (Expressive One-Word Picture Vocabulary Test) の結果を基に、判断された。

実験1では、(A) 仏語優位モノリンガル児15名 (=仏語高レベル)、(B) 仏語優位バイリンガル児9名 (=仏語中レベル)、(C) 仏語劣位バイリンガル児8名 (=仏語低レベル) が参加した。実際の発話はCHAT形式 (MacWhinney, 2010) で文字起こしされ、説明の内容がどの程度、特定の詳細であるかという観点から、「正確」「不正確」「その他」に、また映像的ジェスチャーの使用に関しては、「動作の様態」「大きさ」「形」にコード化された。子どもにより発話数に違い



があったため、ジェスチャー使用率（出現率）で分析した結果、Aグループ（仏語高レベル）とCグループ（仏語低レベル）が、Bグループ（仏語中レベル）に比べて、より頻繁にジェスチャーをしたことが示された。仏語低レベルの子どもは、適切な語彙を探すためにジェスチャーの使用率が高かったと考察できる。例えば、*C'est le c'est le c'est le poisson qui a qui a des piques là* 「えっと えっと えっと そこにトゲトゲのある魚」という子どもの発話例から、映像的ジェスチャーを伴うことで適切な語が見つかり、必要な情報を実験者に伝えられた可能性が考えられる。一方で、仏語高レベルの子どもが、仏語中レベルの子どもよりジェスチャー頻度が高いという結果は、言語レベルの低い子どもとは異なる理由でジェスチャーをしたと考えられる。この証拠として、説明の質の観点の分析結果から、仏語低レベルの子どもは中レベルおよび高レベルの子どもに比べ、「正確な表現」が有意に低く、また「不正確」な表現が有意に多かったことが挙げられる。

実験2では、(D) 日本語優位バイリンガル児8名（実験1でフランス語劣位）、(E) 日本語劣位バイリンガル児9名（実験1でフランス語優位）、(F) 日本語モノリンガル児8名、が参加した。実験1とは異なり、日本語レベルに関しては、3グループの間で語彙テストの結果に差は見られず、言語レベルにも差がないと判断された。したがって、日本語の言語レベルが同じなので、ジェスチャー使用率にも有意な差は生じないと予測された。実験1と同じタスク（アニメ映像は異なるもの）を行い、子どもの発話とジェスチャー使用を分析した結果、予測通り3グループ間で、発話の内容や質の点からも、また映像ジェスチャーの使用頻度にも有意な差はなかった。

2つの実験結果から、ジェスチャーの使用は、言語レベルが低く意図することを伝えるのが困難な子どもと、言語レベルは高く意味を明確に伝えることはできるが、その表現伝達を一層強化しようとする子どもの両方に頻繁にみられる結果となった。ジェスチャー研究はバイリンガル研究の中でもまだ数が少なく、今後の研究が期待される。

*Zvaigzne, M., Oshima-Takane, Y. and Hirakawa, M. (2019). How does language proficiency affect children's iconic gesture use? *Applied Psycholinguistics*, 40, 555-583.

発表要旨

Seeing through the Mind's Eye: Vision, Memory, and Imagination in George Eliot's Three "Recollections" and her Works

佐藤 エリ

(神戸女学院大学大学院文学研究科英文学専攻
博士後期課程修了 博士(文学))

Through her frequent travel experiences, George Eliot wrote six "Recollections" that were based both on her domestic and international travels from 1854 to 1860. Although they were not intended for publication, Eliot sorted out episodes from her diary, organized and modified them, and presented them to imaginary readers. While few critics have viewed these "Recollections" as a prototype of her novels, we can read them as a genesis of her creative work. In this paper, I clarify the association between three of her "Recollections" and works.

By helping George Henry Lewes's study on marine species in Ilfracombe, Eliot comes to find out the importance of close observation of objects, especially the natural landscape and other phenomena. From "Recollections of Ilfracombe 1856" onward, which was written in the course of her "decisive move to fiction" (Harris and Johnstone 259)¹, Eliot meticulously describes what she senses from the natural world, such as its changing aspects due to the effects of light. She also mentions the psychological effects of viewing the landscape, especially in "Recollections of Ilfracombe," with her animated spirit overflowing. However, in "Recollections of the Scilly Isles and Jersey 1857," her narration becomes less vivid due to both physical and mental problems, although her keen sense of observation never wanes and she considers it "an acquisition" to see Scilly's "unique scenery." In "Mr. Gilfil's Love Story" (1857), which she completed while staying in Scilly, Eliot also precisely portrays the landscape, which is

often associated with Caterina Sarti's dynamic shifts of emotion. Caterina's mind sometimes sympathetically connects with the vision of the landscape and at other times distances from it psychologically by the intervention of her memory. "Recollections of Italy 1860," in which Eliot expresses new interests and ideas through her travel to Italy, is vital for her career as a successful novelist and deeply connects with *Romola* (1862-63) and her later works. At the beginning of "Recollections of Italy," Eliot mentions "the frequent double consciousness," which tells her that she is "not enjoying the actual vision enough" and that she cannot fully reproduce the details in "higher enjoyment" through imagination. In *Middlemarch* (1871-72), Dorothea Brooke is overwhelmed by the ruins and relics of Rome, which is an uninterpretable sight for her, mingling with her own disappointment in marriage and her confused state of mind. Even after her return from Rome, the memories begin to revisit Dorothea, engaging with her "actual vision" towards the landscape. Specifically in this paper, I explored three of her "Recollections," "Mr. Gilfil's Love Story," and *Middlemarch* to examine Eliot's depiction of how the heroines' mental and physical "visions" are affected by memory and imagination and how they change across her early short story and later novel.

¹ ---. *The Journals of George Eliot*. Eds. Margaret Harris and Judith Johnston. Cambridge: Cambridge UP, 2000.

発表要旨

日本の食文化を英語で表現する

中島 道光

(神戸女学院大学大学院文学研究科英文学専攻
博士前期課程修了 修士(文学))

和食が世界無形文化遺産に登録され日本の食文化への関心が高まる中、食の話題は外国人との交流に欠かせない。この授業では、習熟度が異なっても一定の成果が出せるよう以下の4点を取り入れている。

1) グループディスカッションでミニプレゼン

授業で学んだ表現 (例: ある料理の作り方) を参考に、自身にあてはめて書くこと (例: 私の好きな料理の作り方) を課題とし、グループ内でミニプレゼン (+ 質疑応答) をする。

2) ビジュアルエイドを活かした中間・期末プレゼンテーション

料理や食材を目の前にして話す場面を想定し、バーバル・ノンバーバル両面で聞き手に伝える工夫をする。

3) 日本語をパラフレーズする力を養う

英語にしやすい日本語にパラフレーズする、複数の短い英文でつなぐなど、伝えたいことを各自のレベルで十分に表現できるようにする。

4) グループプレゼンテーションでテーマを掘り下げる

グループでの調査・考察を通してより深い知識を得ると同時に、他の発表を聞いて知識の幅を広げる。

国際学会発表(会員氏名ABC順)

*石川有香 氏

“Lexical Analysis of Engineering Papers: Development of e-Learning Materials for Engineering Students” ベトナム(Danang大学)で開催されたGloCALL 2019 (2019年8月9-10日)にて研究発表。

“A Comparative Study on the Vocabularies Seen in Engineering Papers Written by Professional Researchers and Graduate Students” 韓国外国語大学で開催された2019 Joint International Conference on English Teaching and Learning in Korea (2019年7月4-6日)にて研究発表。

“Possibilities of ESP “Learner” Corpus: Collecting and Analyzing the Abstracts of Engineering Papers Written by Young Researchers” 神戸大学で開催されたInternational Learner Corpus Symposium, LCSAW 4 (2019年9月29日)にて研究発表。

“Gender Representations in English Textbooks Pictures and Illustrations” シンガポール(ロイヤルホテル)で開催されたICLEHI 2020 (2020年2月22-23日)にて研究発表。

*高雅妃 氏

“Psychological Distance and the Hearer’s Inference” 韓国(高麗大学)で開催されたThe 24th PAAL Conference (Pan-Pacific Association of Applied Linguistics) (2019年8月20-21日)にて研究発表。

*小杉世 氏

“Trans-Pacific Imagination of Resistance and Resilience in the Anthropocene” 神戸女学院で開催された国際会議Innovative Textual Practices in English in the Asia-Pacific (2019年10月19日)にて研究発表。

*南出和余 氏

“Memories, Narratives in the Field of An Ethnographer: Notes on Professor Tadahiko Hara’s Ethnography” オーストラリア(ブリスベン・ヒルトン)で開催された The 17th Qualitative Methods Conference (2019年5月1-3日)にて研究発表。

*三宅伸枝 氏

“The Critical Spirit and ‘The Statues’” アイルランド(Trinity College Dublin)で開催されたIASIL 2019 (2019年7月22-26日)にて研究発表。

“‘A Bronze Head’, Where Eros Led Him To” フランス(La Sorbonne Nouvelle)で開催されたThe annual International Yeats Society Conference (12月12-14日)にて研究発表。

*佐藤エリ 氏

“How Does She Perceive the World? The Effect of the Landscape on the Mind in George Eliot’s Two ‘Recollections’ and ‘Mr Gilfil’s Love Story’” イギリス(Leicester 大学)で開催されたGeorge Eliot 2019: An International Bicentenary Conference (2019年7月17-19日)にて研究発表。

*立石浩一 氏

“Perception of Narrow Focus by Bilingual Speakers” オーストラリア(Melbourne Convention and Exhibition Centre)で開催されたInternational Congress of Phonetic Sciences (ICPhS) (2019年8月4-9日)にて口頭発表。(Shinobu Mizuguchi, Yukiko Notaとの共同研究)

“Why L1 Is Not Easy to Hear - An fMRI study of the focus perception by Japanese/English late-onset bilinguals -” 米国(Hilton New Orleans Riverside)で開催されたThe 94th Meeting of the Linguistic Society of America (2020年1月2-5日)にてポスター発表。(Shinobu Mizuguchiとの共同研究)

*Goran VAAGE 氏

“Teaching the Structure of Jokes in English - A Case Study of Japanese College Students” 米国(テキサス大学)で開催されたThe 2019 Conference of the International Society for Humor Studies (2019年6月24-28日)にて研究発表。

“Japanese Humor Structures in the My Funny Talk Corpus” スペイン(アリカンテ大学)で開催された International Conference on Verbal Humor (2019年10月23-25日)にて研究発表。

会員による出版紹介(会員氏名ABC順)

◇別府恵子 氏

『「聖母子像」の変容——アメリカ文学にみる「母子像」と「家族のかたち」』(単著、大阪教育図書、2019年6月)

“Claims of Art and of Social Duties: Hyacinth’s Choice in *The Princess Cassamassima*”, *Reading Henry James in the Twentieth-Century: Heritage and Transmission*. 2020, (共著、Cambridge Scholars Publishing, 2020)

◇風呂本惇子 氏

『エスニシティと物語り——複眼的文学論』(松本昇監修、共著、金星堂、2019年10月10日) 391-401頁。

◇東森勲 氏

『認知言語学大事典』(辻幸夫編、共著、朝倉書店、2019年10月) 191頁。

◇小杉世 氏

「マーシャル諸島から太平洋を越えて——キャシー・ジェットニル＝キジナーとロバート・パークレーによる戦争・核／ミサイル実験・地球温暖化の表象」『トランスパシフィック・エコリティシズム—物語る海、響き合う言葉』(共著、彩流社、2019年9月) 175-189頁。

◇南出和余 氏

『子どもへの視角-新しい子ども社会研究』(共編著 新曜社2020年2月20日)

英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年から卒業論文および卒業プロジェクトのコンテストを開始し、今年度も担当教員からの推薦による11名の応募を受けつけた。2月に英米文学文化、言語コミュニケーション、通訳・翻訳プログラム、グローバル・スタディーズの各部門で選考を行い、最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者を以下の通り決定した。

英米文学文化 (応募者 1名)

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

該当者なし

言語コミュニケーション (応募者 2名)

<最優秀賞>

E16130 山東 天海

<優秀賞>

E16133 澤野 理

通訳・翻訳プログラム (応募者 4名)

<最優秀賞>

E16106 西岡 美帆

<優秀賞>

E16019 後藤 優里奈

グローバル・スタディーズ (応募者 4名)

<最優秀賞>

E16091 永山 朋実

<優秀賞>

E16015 藤原 あみ

E16143 首藤 和子

記念賞

2019年度、以下の学生に対して、次の学内記念賞が授与されました。

タルカッタ記念賞	E17045	川端 千智
デフォレスト記念賞	E17012	普家 未調
丹部トモ記念賞	GE1833	高田 理子

神戸女学院大学英語英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)
(2005年 9月22日改訂)
(2010年 3月 2日改訂)

- (1) 名称
本学会を神戸女学院大学英語英文学会と称する。
- (2) 目的
本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修士生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成
本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士生有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動
年一回、英語英文学会大会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英語英文学会その他の活動の内容を報告する。その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

内規

I. 大会での発表について

- (1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、KCSSES運営委員会で審査の上、決定する。

II. 維持費・参加費について

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3) に関しては、KCSSES専用の口座を利用する。



編 集 後 記

会員国際活動報告・出版物のご連絡を有難うございました。今年もKCSES学会会員の皆様から頂きましたご連絡を嬉しく、また、心強く拝見致しました。皆様の益々のご研究のご発展を心よりお祈り申し上げます。

厚かましいお願いで誠に恐縮ではございますが、神戸女学院教育振興会へのご寄付をお考え下さいます際には、「英文学科学生のために」と一言お書き添え頂ければ有難く存じます。学生の学会及び研修会参加費の補助に用いさせていただきます。お力添え賜りたく、どうぞよろしくお願い申し上げます。

KCSES Newsletter編集委員

(2019年度運営委員)

○松尾 歩 ○南出 和余 ○白井 由美子 (ABC順)

KCSES Newsletter No. 35

編集発行 神戸女学院大学英語英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

<http://www.kobe-c.ac.jp/english/gakkai/gakkai.html>

2020年3月発行